

Web版

一本道

第2号
通巻第72号

【本誓寺講演録】

令和六年十月二十五日 報恩講より

「一瞬、一息、一声の称名念仏」(第一回)

金沢教区三上組 浄土寺住職 大窪康充 先生

皆さん、これだけは信じてください。仏法に出あわなかったら本当に損をしますよ。損得勘定じゃないですが、たった一度の人生を豊かなものにしてくださる、先代が引き継いできた仏法にぜひ出あってほしいと思います。

私は来年、還暦です。還暦というのは「元の暦に還る」という意味です。これまで自分のためだけに生きてきたように思うのですが、還暦を迎えるにあたり、これから他人様に恩返しできる人生を送りたいと思います。私の恩返しとして、ひとりでも多くの方々にお念仏の教えに出あってほしい、そして自他ともに豊かな人生を送っていききたい、そんな仏さまの願いを伝えていくことだと改めて思うところです。

今回テーマとして「一瞬、一息、一声の称名念仏」という題

を出させていただきました。

そのきっかけになったのは、皆さんの記憶にまだ新しいと思います。一月一日の能登の大震災です。私の母親は穴水町の出身です。そして実姉は富来のお寺に入寺しています。その関係で能登の親戚は決して少なくありません。ここ本誓寺さんの坊守さんも輪島の出身ですね。当寺の住職さんもそうだと思いますが、本当に身近なでき事として気にかけており、これまでもずっとアンテナを張ってここまで来られました。ことに、私のいとこにあたる住職、門前のお寺に入寺されたのですが、地震の当日、その住職の奥さん、坊守さんが亡くなりました。地震が起こった時点で、庫裡の屋根が落ちてきて圧死状態だったのです。すぐ隣にいた娘さんは助かったのですが、その時の住職の言葉がとても印象的で、今でも脳裏に焼きついているのです。振り絞るようにつぶやいたその言葉とは、「命は本当にはかない」ということでした。つい先ほどまで一緒にご飯を食べていたのに……。そして、その後、「命というのは本当に一瞬なんだな」と何気に言われ、その言葉がずっと私の耳に残っているのです。

その時に思い起こしたのが、『四十二章經』という古い經典にある内容でした。その中に次のような釈尊とお弟子さんの問答があるのです。釈尊がお弟子さんたちに問いかけます。「人間の寿命はどれくらいか」と。皆さんは、そのように聞かれたら何てお答えしますか。人間の寿命ってどれくらいだって言わ

れたら、パツと平均寿命なんかを思い起こされますか。今現在はどうでしょうか。男性は八十歳をこえるくらいですか。女性は八十六、八十七歳くらいでしょうか。お弟子さんたちは、いろいろ答えます。「人間の寿命は四十年ぐらいですか」、「修行をするくらいは時間ですか」、「食事をいただくひとときの時間ですか」等々。でもお釈迦さん是一向に首を縦にふりません、うなずかないのです。するとあるお弟子さんが思いついたように、「人間の寿命というのは一瞬ですか」と問いかけました。そのときに初めて釈尊はうなずいて答えます。「人間の寿命というのは一瞬です」と。私たちは一瞬一瞬の寿命を生きているというのです。いわば一呼吸、一呼吸、そして一息、一息のその中に自分の全生涯が収まっている、そういう釈尊のお答えだったのです。

これは一体どういうことなのでしょう。一瞬、一息、一声のその中に私たちの命というものが常におさまっているとは何をあらわしているのでしょうか。

よくよく案ずれば、私たちは「生」と「死」を生きています。生まれ変わり死に变りの連続する「生死」の世界です。皆さんには失礼ですけど、昨日の皆さんは、死んでますよね。もつと言え、十秒前、一秒前の皆さんも死んでいます。でも死んだその瞬間に新たに生まれ変わっています。そのような「生」と「死」の繰り返し、いわば「生死流転」をこえていくということが仏教の教えであり、そして悟りということだと思います。

ならば「生死」をこえていくということは一体どういうことなのか？ ちょっと難しいかもしれませんが、それが一瞬、一息、一声の念仏を称えるという課題につながっていくのだと思います。

私事で失礼ですが、前住職の父親が、今年三月に還帰、いわば浄土に還られました。仏教では、死ぬという言葉はあまり使いません。入滅、滅に入ると言います。いわば亡くなるということ、滅の世界である浄土へ還る、元の土に戻る、ふるさとへ帰るといいう方をよくします。ふるさと浄土に帰った前住職でしたが、そのきっかけは誤嚥性でした。誤嚥性肺炎ではありません。食べ物、喉じゃなくて、胃の手前で詰まったのです。その亡くなった日というのは、私の誕生日でした。私の実姉は姫路のお寺に嫁いでいるのですが、「じいちゃんに美味しいもの食べさせて」と言って、A5ランクの神戸牛をふんばつして送ってきたのです。父親に美味しいものを食べさせたいという親孝行のつもりで送ってきた高級なお肉です。確かに初めて見る霜降りの美味しそうなお肉でした。当初は皆で食べようと思っていたのですが、その日はご門徒のお通夜のお参りがありました。連れ合いがすき焼きにして、父親に先に食べてもらおうとしたのです。彼は介護認定四を受けており車椅子の生活です。毎晩、ヘルパーさんが七時半に来られるということもあって、「じいちゃん、悪いけど、一人で食べとってね」と言って、たまたま坊主も台所から離れて仕事をしていたのです。

そして私が、お通夜から帰ってきたら、車椅子に坐ったまままで全然動かない父親を発見しました。すぐに救急の電話。救急隊員の指示をうけて処置をしながら、日赤の病院へ連れて行ったのですが、その間全く反応がありませんでした。私は病院にいます間、誰か一緒にいたら救えた命だったのではないかと、そんな心配ばかりしていました。けどお医者さんが、「苦しんだ様子はいいですね。おそらく一瞬で気を失ったのでしょね」と仰ったのです。胃の手前にでっかい肉のかたまりが出てきたことから、いわば食道に詰まって酸素がいなくなり、一瞬のうちに気を失って亡くなったというのです。いくらかお肉も食べた後でした。最初は困惑してどうしようかなと思っていたのですが、お医者さんが「飲み込む力がなくなっていた。これも老化の一つですね」という言葉に対して、ちょっと不謹慎かもしれませんが、素直に諦められた思いでした。今になって思うのですが、父親の心配よりも、自分の保身ばかりを気にしていたことに恥ずかしさを覚える次第です。ただ、深刻に考えていたこの出来事が、だんだんと笑い話になって、周りの親戚の人たちが「最後まで美味しいもの食べて往ったからよかった」、

「よっぽど美味しいお肉やったのやね」、「本当にじいちゃんらしい死に方や」と言ってくれて、正直、少し安堵した自分がいきました。九十四歳の大大往生だったと思います。足腰以外はとも元気で、頭もしっかりしている。だから、百歳まで長生きするだろうと、まさか今日死ぬとは誰も思っていないでした。

まさしく「命ははかない」、そして「命は一瞬である」ということを痛感した次第です。

介護が始まった頃、一番困ったのは、父親は自分の老いを受け入れられず、素直に施設のサービスを受けようとしなかったことでした。「紙パンツはいてくれ」と頼んでもダメ、どうしても手が空かない時に「デイサービスへ行ってくれ」と懇願しても、頭はしっかりしていますから、なかなか言うことを聞いてくれませんでした。以前、「頼むから二泊三日のショートステイへ行ってくれんか」と頼んでも、「うん」とは言いませんでした。私が「なんで行ってくれんがや?」と聞いたら、「そんなもん年寄りばかりや!」って言って私たちを驚かせました。九十四歳のじいさんが、周りを見て「年寄りばかりや、耳の遠いものばかりや」と。おそらく本人の耳が一番遠いのですよ。それだけ気丈で元気な人だったのです。もしも今日亡くなると、もしも癌か何かで余命いくばかりもないとわかっていたら、私もちょっとは優しい言葉をかけられたと思います。亡くなる当日は、じいちゃんを日赤の病院へ連れていかなければなりません。家に帰ってきて、車からおろそうとしてもじいちゃんは足を動かそうとしません。だから私がバチーンとじいちゃんの足を叩いて「はい、足を動かせ!」「ちゃんと力を入れて!」と。それが最後の言葉でした。うちの連れ合い、坊守は、「すき焼きできた。じいちゃん、一人で食べとってね」

と言っても、「は？」ととぼけ顔。「ごはんや!」、「は?」、「だからご・は・ん!」とでっかい声を出しました。まあそれが最後のことばでした。もうちょっと優しい言葉をかけてやればよかったかなと、私も連れ合いも、少し後悔が残っています。

生前、いろんなことがありましたが、ただ思うのは、父親は、やっぱり念仏を残してくださった。念仏を通して、また出あい続けていく、出あい直していける。念仏を通して、亡き人と仏のはたらきの中で対話ができる。「ありがとう、ごめん」、「ごめん、ありがとう」と。そういう、人が亡くなった後も、浄土へ還られた後も、一声の念仏、その声なき声を通して、故人を仏として仰ぎ、新たに出あい続け、どこまでも教えられる世界があるということです。

そんな一瞬、一息、一声の念仏とはどういうことなのか、さらに具体的にお話していきたいと思います。

第二回に続きます。



講師紹介 おおくぼ 大窪 康充
こうじゅう

昭和四十年石川県白山市(旧松任市)生まれ。金沢教区第三上組浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院前指導主任。著書に『念仏の音が聞こえるとき』『正信偈』『歎異抄』との対話(法蔵館)、『念仏の音が宝となるとき』生活にいきる『教行信証』のことば(法蔵館)、『合利佛の物語阿弥陀経の黙った主役』(京都月出版)など。

